

旧ソ連孤児の 大学生を10年間近く 支援を続ける活動

旧ソ連学生奨学援助日本基金 代表委員 事務局長

横須賀 壽子さんに聞く



横須賀さんは、1925年東京にお生まれになり、戦後、平和運動に関わり、特に善隣友好を通して平和に貢献したいとの思いから、1966年より日ソ友好団体に参加、71年から89年の間、日ソ親善協会(会長 赤城宗徳)に勤務。自民党の赤城議員の下でお仕事に専念。89年にご主人を亡くされ、また旧ソ連が崩壊したことから、一念発起して、個人の立場から、ロシアの孤児たちに学資を送るボランティアを始めたという。現在、長崎の被爆マリア像を展示するペラーシでの被爆展の準備にお忙しい所、横須賀さんにお話をうかがった。(文責:編集部)

1992年、「旧ソ連学生奨学援助日本基金」の設立に中心的役割を果たした横須賀さんは、その後、事務局長として多忙な実務をこなしてきた、と明るく笑う。基金を始めた頃は「5年もすればロシアの経済も回復するだろう」との予想だったが、今なお援助を求める大学生が減っていないそうである。日ソ親善協会の頃から30年間に2,3回はロシアを訪問してきたというロシア通。

ソ連の体制が崩壊した時には、大きく社会体制が変わり、すさまじいインフレの中での市民生活を知り、横須賀さんは、日本の敗戦後の苦しかった生活を思い出した。旧ソ連時代には、誰でも無料で教育を受けられたのに、現在では、国からの奨学金もわずか、非常に厳しい学生生活だとのこと。横須賀さんは、協会の頃からの人脈を通して、ロシアの友人たちに呼びかけて、ロシアの若い人たち、特に両親のいない大学生を支援する運動を始めた。以来10年が経とうとしている。今は苦しくても、明日のために生きようとしている若者の学資を支援し続けてきた。これまでに基金から支援を受けた学生の数は300人近くに及ぶ。

ロシアに行った時には、必ず奨学生たちに会ってくるのが楽しみ、と、ひとりひとりの奨学生の経歴を語る横須賀さんは、学校の先生が教え子を語る時のように、実にうれしそうだ。奨学生は孤児なので、横須賀さんのことをママと呼ぶ子もいるそうだ。またロシアで、信頼できる多くの良い友人たちとめぐり合ったことが幸せだ、またこの友人たちとの信頼があればこそ、今日まで援助活動を続けてこられた、と語った。

ロシアの人々の生活は、ソ連体制崩壊の直前に起こった地震や、チェルノブイリ原発の事故もあって、今もなお、回復していない。横須賀さんは、戦後、我が国で小児麻痺が流行した時、ソ連から日本の子どもたちに小児麻痺ワクチンが贈り届けられ、子どもたちを救ってくれたことを忘れられない。横須賀さんが支援を始めた頃は、文房具や衣料品や薬を贈ったが、知人、友人の手荷物として運ぶのには、限界があった。

そして、物よりも、教育を支援することのほうが大切であると、考え方を切り替えてからは、学資を送ることを始めた。しかしロシアでは、銀行や郵便局がまだまだ整備されておらず、学資を送るのも、これまた大変。4ヶ月毎に奨学金を運ぶ苦労も、相当なものだとのこと。横須賀さん自身が、ロシアへ行く時に持参して、ロシア側の世話人に手渡すことも多いそうである。

若手オペラ歌手のヒブラ・ゲルズマフ(Hibla GERZMAVA)さん(今年30才)は、この基金の奨学金を受け、卒業した学生のひとり。1994年、大学院の時に、第10回チャイコフスキー国際コンクールで、みごとグランプリ優勝。このコンクールは4年に一度モスクワで開かれ、若手音楽家の登竜門として世界的権威を誇り、該当者なし、のことも多い超難関のコンクールとして国際的に有名である。

ヒブラさんは、1996年には「ジャパン・アーツ」が主催した「ソプラノ・リサイタル」のために、来日した。その時、「両親のいない私にとって、横須賀さんは母です。この奨学金は私のこころの扉を開いてくれました。日本の家族のみなさんのことを、一生忘れません」と、横須賀さんの努力と日本からの援助に対して、心からの感謝の言葉を述べた。

横須賀さん個人が中心となっている基金の活動を、側面から、いろいろな形で支えてくれる友人たちが、日本にも、ロシアにもいる。個人の善意と信頼とに支えられながら、成り立ってきた活動。通訳や翻訳などは、ボランティアの協力者が助けている。また、年2回から3回発行される基金の機関紙「地球人」(社)のために、横須賀さんの編集作業を、ボランティアが協力して助けている。

「地球人」には、ロシア各地の大学生たちから、感謝と勉学への決意の手紙が、たくさん寄せられている。また、毎年新しい奨学生たちの顔写真も「地球人」紙上で紹介されている。



基金の奨学金を受けているロシアの大学生たちと

将来、これらの若者たちの中から、日露の友好関係の架け橋となるひとが、必ず出てくるものと信じている、と横須賀さんは樂觀的で、にこやかに語るその表情は、若々しく、印象深かった。ただ、モスクワの事務局で『日本人より心をこめて(仮称)』の題で出版物が企画され、ロシアの奨学生の手紙を基に、学生の奨学金支援についての活動を記載した本が出版される予定だったのが、経済的な理由で中止になってしまった、と話す時には、いかにも残念そうであった。

彼女は、学生援助基金の活動の他にも、反核運動にも、情熱を注いでいる。特に99年秋には、長崎の被爆者や平和運動に取り組んできた人たちの願いを受けて、サンクトペテルブルグ市の「国立歴史博物館」の館長に交渉し、長崎の被爆の実相を伝える常設展示室をつくる許可をとった。今、長崎の実行委員会は、その実現に取り組んでいる。

また「長崎県被爆者手帳友の会」の会員の手で出版された画集『空白の20時間』をベラルーシの反核運動を推進している友人に送ったことから、原爆展を開催したいとの相談があった。そこで、朝日新聞の被爆マリアの記事(98年12月付)のコピーを、友人に送って、カトリック教会を動かし、ミンスクのカトリック教会からの要請を、長崎の大司教に伝えた。

こうした横須賀さんの努力が、ついに実を結んで、今年9月には、ベラルーシにおいて「20世紀の核の悲劇」展(広島・長崎・チェルノブイリ)が開催される運びとなった。

同時に開催された「世界のヒバクシャに捧げるミサ」においては、長崎の浦上天堂の三村神父が、「被爆マリア像(木製)」を、自ら手に持って出席し、また「長崎の鐘」の贈呈式も行われた。

「20世紀の核の悲劇」展は、9月23日(土)、そして「世界のヒバクシャに捧げるミサ」は、翌9月24日(日)に、聖シモン・聖エレーナ・ローマカトリック教会で行われたが、日本からも1週間のツアーが企画され、これらの行事に参加した。



ロシア側の世話人と



(*注)

機関紙「地球人」は、会員に配布される。

会費は、個人会員 年1口1万円、法人会員 年1口10万円。

任意の寄付金も歓迎されている。

連絡先: 旧ソ連学生奨学援助日本基金(事務局)

〒204 - 0012

東京都清瀬市中清戸1 - 607

TEL 0424 - 92 - 0521

FAX 0424 - 95 - 3331

ご寄付の口座名:

<郵便振替口座>

旧ソ連奨学日本基金 00120 - 1 - 606624

<銀行口座>

旧ソ連奨学日本基金 富士銀行 清瀬支店 普通1927471